

特249

920

文學博士 富士川 游先生講演

宗教講話

三和佛教會



始



特 249
920

宗教講話

第四席

宗教としての佛教

文學博士
醫學博士

富士川 游先生講演



前三回に涉りてお話し致したことは、今日佛教といはれて居るものに就て、宗教の意味をお話しする積りで、その端緒として豫備的なことを申上げて置いて置いたのであります。今回も亦、これを繰返してお聞き願つて置き度いと思ひます。元來、宗教といふのは、前に已に申したやうに、知識の領分であるところの學問、哲學或は道德、かういふものとは、精神のはたらきが違ふて居るのであります。若しこれ等のものと同様に考へて宗教を考へますと、幾ら考へても、考へれば考へるだけ、本當の宗教から遠ざかつて行く譯であります。又學問としての佛教につきてお話しすることは私の目的とすることでもありません。私としては唯宗教としての釋尊の教が、どういふ意味を持つ

て居るものであるか、その本當の精神はどうであるかと云ふことに就いて、簡單にお話を致し度いと思ふのであります。それには順序を立て、お話し、なければ結局何を申したか分らなくなり、皆様も何をお聞きになつたか分らなくなるのでありますから、廻りどいやうではあります。先づ宗教の本質を説き、さうしてそれが道徳と異なる所以を申上げ、續いて釋尊の説かれた教につきて概畧お話し致したのであります。

◇ 自我機能

茲で一寸お話しして置き度いことは、一體宗教は精神のはたらきとして、果して如何なるものであるかといふことであります。我々の心のはたらきとして、我々は常に或る物に對して自我機能のはたらきをあらはすものであります。この自我とは自分を自分と識る意識を指すのであります。さうして、この意識は自我として、常に外界の或る物に對して、その態度を變へるものであります。これを具體的に申しますならば、たとへば、空氣の温度が上れば暖かくなります。この暖といふことに對し我々の自我はその時によつて態度を變へ、冬の日の寒い時分には樂と感じますけれども、夏の暑い時分にはこれを苦しいと感ずるやうにその態度は變はるのであります。普通にこの自我の態度を感情と名づけて居るのであります。しかるに、宗教の場合は、この自我の態度が特別な状態をあらはすのであります。普通の場合この自我の態度は人々によりても差異があるものであります。たとへば、非常に物ごとを深く考へる人もあり、餘り深く考へない人もあり、又一寸したことを苦に考へる人もあり、これに反して何ごと

樂觀する人もあります。又肉體的にも生れつき壯健な人もあれば、虚弱な人もあり、或は又従事して居る仕事の相違と云ふやうなことがあり、其他色々の條件によつて自我機能は互に相違するものであります。しかし、それは別問題として、今こゝに自我機能の對象につきてお話しすと、普通の場合ではその對象が明瞭でなければならぬのであります。宗教の場合ではその對象が明瞭でないのを特徴とするのであります。たとへば神佛と我々が申して居りますものは、一ツの對象としてそれに對して自我機能があらはれて、自我はいろ／＼に態度を變へるものであります。その對象たる神或は佛が明瞭であるときには、普通の感情が起つて宗教的の感情は起らぬのであります。元來神佛がどういふものであるかといふことを考へるのは、宗教的思考でありまして、その思考にして、若し明瞭にあらはれた場合に、こゝにあらはれる自我機能は本當の宗教のはたらきではないのであります。又さういふ場合の思考と云ふものは極めて具體的のもので、たとへば人間の形をした神を考へ、或は人間の意識を持つて居る様な佛を考へるのが常でありまして、さうしてかやうに具體的に考へるところの思考に對して起る自我の態度は、普通我々が一般の物に對して起すのと全く同じであります。自分が氣に入れば之を取り、自分が嫌だと思へば直ちに之を排斥するのであります。西洋の學者の中には「宗教は感情の働きなり」と云つて居るものもありますけれども、若しさうであるとすれば、自分の心の欲するまゝに都合の好い方へ其感情を走らせ、自分にとつて都合の悪いと感ずる方のことは、之を避け様とする結果となるのでありますから、非常に低級な感情本位の宗教が出来上ることになるのであります。この思考を低級な宗教的思考と云つて居ります。従つて明瞭な、さうして具體的の宗教的思考

に依つて起る宗教的な自我は低級なものであります。

◇ 神、佛に對する自我

感情といふことにも註釋を要するであります。多くの人は、神佛と云ふものを低級な宗教的思考によつて考へ、人間の力ではどうすることも出来ないと思つた場合、この上は神佛の力によるより外仕方が無いと云ふ風に考へるのであります。かういふ思考は全く人間の得手勝手から起るところのものであつて、非宗教的なものであります。さうして宗教と名のつくところのものは、佛敎でも或はキリスト敎でも、かやうに得手勝手の心を去つて、神佛の心に従ひ、心を常に正しく持ち、悪いことは之を懺悔をして改め、悪より善に心を轉ずる様にせよと説かれるのであります。どうしてもこの得手勝手の心を断たなければ、宗教の本當の働きである「迷を轉じて悟を開く」とか或は「安心立命」と云ふ心の起る筈は無いのであります。神佛に向つて我々がいくら願を頼んでも、神佛は必ずしも我々人間のいふ通りになつては呉れられるものではありません。すると神も佛もこの世には無いものかといふやうに嘆息するのであります。しかし人間の得手勝手の心の前には、神佛は存在しないのであります。佛も無慈悲であると訴へることもありますが、佛とは慈悲の心を云ふのだと説いてありますから、無慈悲な佛のあらう筈はありません。神といふものは利益があるから神といふので、若し利益が無ければ神では無いのであります。自分の得手勝手にならぬときには利益がないと愚痴をこぼすのであります。それ故に、神佛と云ふものは到底我々の思考す

べきものでない、實に不可思議なるものであるといふところまで、宗教的思考は進まなければならぬのであります。この不可思議と云ふ思考を對象として、この對象に對してあらはれるところの自我機能が、本當の宗教の心であります。言葉を換へて申せば、宗教は總て他力的のものでありまして、若し自力のはからひが存在することがあれば、それは宗教ではなくなつて、せい／＼道徳に止まつて居るのであります。このことは機會があれば詳しくお話をする積りでありますけれども、かういふ意味のことをよくお考へ願つて置いて、次に釋尊の説かれた敎——即ち佛敎の根本的説明の結末をつけて置き度いと思ひます。

◇ 佛敎の根本的精神

釋尊の説かれた敎が一體如何なるものであつたかといふことは、今迄専門の學者の方々から種々お聞きになつたことも思ひますが、恐らくは、それは佛敎の教義とか又は學問的の説明であつたことと存じます。勿論佛敎の書物の中には、哲學もあり科學もあり、其他種々學問的な部門もありますが、今私はさういふことに就てお話を致すのではなく、宗教として、そこに現れて居る精神が如何なるものであるかといふことでありますから、この點を更にお断り致して置きます。

釋尊の敎へに就て、其中に一貫して居る精神は、第一に其敎が人生の事實を儘々眞面目に觀て、さうしてそれを分析した結果、本當の姿を明かにするといふところに出發點があるといふことであります。さうしてそれによつて

人生は實際に於て苦であると知らなければならぬといはれるのであります。苦と知らなければならぬのは、そこに無常といふものがある爲めであつて、無常は更に因縁に依つて生ずるものであるとするのであります。之を根本精神として釋尊はその教を説かれたのであります。

その當時印度に於て多くの學者達が説いて居つたのは、苦といふものは別に存在して居るものである。さうして我々人間の心にそれが現はれてくるものであると考へ、或は又自在神といふ神があつて、すべての物を作り人間も又之に依つて作られたものであるから、その支配を受けて居るのである。従つて苦といふものは、自在神の心から出たものであるといふことを説いて居つたのであります。この考へ方は「キリスト」教で説いて居るやうに、苦は神から與へられるもので、神の意志である。そも／＼人間が初めて生れ出た時に、既に神の意志に背いて居るのであるから、苦を受けるのは其罪であるといふのと大體に似たものであると思ひます。之に對して釋尊の教は前に申上げた通り、我々に苦しみがあるのは物の道理が明かでないためである。それ故に智慧を得て物の道理が分りさへすれば、その苦しみより脱することが出来るのである。それには八ツの正しい道を修めて、眞實の智慧を得なければならぬと説かれたのであります。本當の智慧といふのは、世の中の眞理を明らかにすることをいふのであります。佛が、それには先づ散亂する心を靜めることが必要であり、それには道德を堅固に保たねばならぬのであります。佛の言葉で申せば戒律を保たねばならぬ。それが十分に修業が出来て初めて、禪定の心が十分になるのであるといふことを釋尊は説かれたのであります。

◇ 聞 法 の 態 度

以上お話ししたことが釋尊の教の概要であります。これは全く人間生活上の事實に基いた考へでありまして、神がさういふことを示されたとか、或は昔からさういふことをいふからと言はれるのでは無くして、全く現在の事實を見ると、さうに違ひないといふところから出たものであります。しかしながら、かういふ教を聞いた人々が、之に對して如何なる態度をとるかは重要な問題であります。一般に教を聞く人は、それを思考として受けて居るのであります。理解が出来るか出来ないかといふことが第一に擧げられることであります。しかし、それは思考の上のことでありまして、その思考に就て悩まされるのであります。例へばお經を讀むと讀んで居る時は成程さうだと思ひましても、暫くすると或はそれに對して迷の心が生じて來るのであります。

かやうな知識のはたらきでは、一時的に心を決するまでは到りましても本當の安心には到らぬのであります。決心と安心とは丁度身体が本當に肥滿して居ると、水ぶくれになつて居ると位に相違するものであります。決心は何時か崩れることがあるものであります。安心は自分の思考の働きを止めて心が安住するのでありますから、崩れると云ふことはあり得ないわけでありまして、我々が或人の話を聞いて、成程さうだ、さうに違ひ無いと思つてその考へに依つて自分の心を定めて居りましても、次に又他の偉い人のいふ話を聞きますと、前に一度決心した其心も變ることがあるものであります。昔から信心が崩れたといふことを申しますが、信心は決して崩れるものでは

なく崩れるのは決心であります。

そこで釋尊が今まで申しました様な教を説かれますと、其の教を聞いた者が、成程我々は我、定、慧の三學を修めて、涅槃の悟りを開かなければならないと考へて、先づ心を決めるのであります。ところでこの決心を宗教だと考へたならば、大きな間違ひであります。若しそれが宗教の場合でなく他の學問、殊に科學であるならば、その心の動搖することが良いのでありまして、例へば、今日定まつたことも明日之を變へることもあるのでありまして、この場合變ることが一段の發展を示すものであります。宗教はそれと全く反對であります。新しき思考によつて、古い思考が全然變化するやうでは宗教の心とは申されませぬ。

◇ 佛 教 の 各 宗

佛教が我國に入つて來ましたのは、御承知の通り奈良朝以前のことではありますが、非常に盛んになつてきたのは、奈良朝時代からのことでもあります。其の當時の佛教と云ふものは全くの學問でありまして、色々と釋尊の教が説かれて居るのであります。さうして、當時行はれた佛教の中に三論宗といふのがあります。この三論宗にて説くところは、自分の思考を否定し所謂無相の觀に達しなければならぬのである。相とは形を云ふのでありまして、我々は元來形を考へてものを觀るからいけないのである。例へば斯う云ふ書物であるとか、机であるとか云ふものは、其の形、姿だけを見て居つてはいけない、形の奥を見なければいけないと云ふのであります。さうして人間の一切の考へを

否定して無相の觀を修することに依つて、禪定を修め涅槃の悟りを開くと云ふのがこの宗の根本的精神であります。その否定の説は八、不中道と申して我々の思考、即ち常と斷、(常であるか斷であるか)それから一と異、(一ツであるか、異ふか)或は生と滅、(生であるか滅であるか)又去と來、(去であるか來であるか)の八ツを否定して、それに一々不を付けて八不といふのであります。(不斷、不常、不一、不異、不生、不滅、不去、不來)さうして、そこに中道があると説くのであります。たとへば有るとか無いとかといふことは、人間が勝手に考へることであつて、この有無を離れたときにまことが存するといふのであります。ところでかやうに思考を否定しようとする思考も、矢張人間の思考でありますから、非想より非非想、非非想より非非非想といふ風に、だん／＼と想を否定して行かねば本當の道に達せないと言はねばならぬのであります。法相宗——之は今でも寺が残つてありますが、この根本精神は萬法唯識——世の中の總てのものは、人間の意識から生ずるのである。一切の事物もこの心を外にして別に存するものでない。しかし、さういふ相をも認めて、性と相とに別けて考へることを説くのであります。しかし、かういふやうな哲學的思考は、すぐに宗教にはならぬのでありまして、この法相宗もその教の上からいへば唯學問として立派なだけでありまして、之を修行することは仲々容易ではないのであります。この法相宗と前の三論宗と云ふは、菩薩乘と申して菩薩が乗ることの出来るものとするのでありまして、劫を経て佛に成ると説くのであります。華嚴宗——この宗派に於て教へるところのものは、諸法因縁によつて生ずることを觀すれば、即ち涅槃のさとりが開かれるといふのであります。

此の如く、奈良朝時代に行はれたる佛教は哲學的思考が多いのでありまして、哲理を除いた宗教の心持をそれから分けることは容易ではないのであります。それで此の如き哲學的思考を排して大乘佛教を宣傳したのは、平安朝の初期傳教大師を以て首とすべきであります。傳教大師は延暦年間に天台宗を起し、大いに新宗教を宣傳せられたのであります。

第五席

大分私のお話も回数を重ねたのでありますが、前回までは、宗教と申す精神の現象の状態についてお話を致し、釋尊の説かれた教を例に致しまして、所謂佛教と名付けて居る宗教の根本の趣旨を概略申上げたのであります。今回から愈々本論に入るわけでありまして、これまでには豫備的に申上げたことを根本に置いて、お話を進める積であります。先づ私の申上げたいことは、佛教が我國に傳來してから、今日に至る迄思想の上で、どう云ふ風に變化をしてきたのであるか、尙その變化を致した所以に就いて、お話を致したいと思ふのであります。無論佛教の歴史を申上げるのが目的ではないのであります。さうして、それは佛教の精神とは大分懸け離れた所謂佛教の傳來のことをお話いたすのであるから、少しお聞き苦しいことゝ考へますけれども、講話の順序でありますから暫く御清聴を煩したいと思ひます。

◇ 大乘佛教と小乗佛教

今日我邦で行はれて居ります佛教は、一口に申しますと、大乘佛教と言はれるものであります。大乘といふ言葉の意味は、乗は乗物でありまして、大きな乗物は多くの人に乗ることが出来るといふ意味であります。従つて、

多くの人の乗れないものは、之を小乗といふのであります。無論小乗佛教をやつて居る人が、自分の佛教を小乗佛教だとは言はないのであります。後の人がさう區別して申して居る譯であります。この小乗佛教は實際我國には行はれなかつたのであります。我國の佛教といへば、そも／＼の初めから大乘佛教であつたのであります。

◇ 南 都 六 宗

最初我國に佛教が傳はりましてから相當長い日月の間、奈良を中心としてそれが行はれて居つたのであります。即ち、三論宗、成實宗、俱舍宗、法相宗、律宗、華嚴宗の六宗でありまして、これを南都六宗といふのであります。この内華嚴宗といふのは、華嚴經といふお經をもととして立てられた宗派であります。この宗派はその内容が難しく、理解しにくい爲めに其法を傳へる人が少かつたのであります。主に朝廷に行はれたのであります。それから三論宗といふのは龍樹菩薩といふ人が造つた三つの論を本として立てられた宗派であります。元來お經といふのは釋尊の説かれたものを言ふのであります。論と名のつくのはお經について菩薩が自分の意見を述べて講釋をしたものをいふのであります。三論は早くから日本に傳りまして、奈良朝以前から既に行はれて居つたのであります。それから俱舍宗といふのは矢張俱舍論といふ論に依つて説を立てた宗派であります。又成實宗といふのは、之も成實論といふ書物に依つて説を立てたものであります。法相宗といふ宗派は他の宗派と一寸類を異にして居るものであります。理論的に、哲學の上からして、其宗名がついたものであります。律宗といふのは、戒律

を堅固に守ることを趣旨として立てられた宗派であります。

かやうに、南都六宗の内、俱舍宗、三論宗、成實宗の三宗は、論によつて立てられた教でありまして、佛教の講釋が主でありますから、従つて佛教の學問をする豫備的な内容であると申すべきであります。それでありまして、俱舍宗にしても、三論にしても、或は又成實宗にしても、實際には宗教として成立しなかつたのであります。結局學問に終つて了つたわけでありまして、ところが律宗は戒律を堅固に保つことをもととしたものであります。どの宗派でも戒律は共通的に重く考へられたものであります。佛教の根本精神は、戒、定、慧の三學をやることによつて涅槃の悟りを開くことが出来るといふのでありますから、戒律はいつでも重んぜられたのであります。これを一派の教として立てたのが律宗であります。従つて、これも佛教として形態を備へた宗派を考へる上には省いて差支へ無いものであります。

◇ 一 切 空 三 一 切 有

この當時の教の根本思想は二ツありまして、一は萬法唯識——この世の中の一切のものは識から造作せられたものであつて、心の外に何も無いのだといふ考であります。世の中のものを見て一切のものは總て空であると説くのが、その根本思想でありまして、成實宗、三論宗などは皆さうであります。

ところがこの一切空といふことに對して、我と云ふものは空だけれども、法は總て實在するものであると説く

のが俱舍宗の考へであります。さうしてこの二ツの相異した説が大變に議論の種となつて、當時非常に喧ましく討論されて居つたのであります。これに對して法相宗といふものは萬法唯識を根本思想として、眞如と現象と云ふ二ツのことを説いたのであります。即ち眞如はものゝ性であり、現象はものゝ相であるといふのであります。さうして一切のものは、我々の心からあらはれるに過ぎず、心の外には何ももの無い——心が一切のものを作るのであるが、其の心の本來は眞如であつて、眞實な雜り氣の無い實に立派なものである。ところが我々はその眞如を知らず、現象のみ見て居るから迷ふのである、と主張したのであります。

◇ 法相宗の隆盛

奈良朝時代他の佛教を壓倒して隆盛を極めた如き觀のあつた法相宗は、當時奈良に大きな寺が二ツあつて兩派に分れて行はれて居つたのであります。即ち猿澤の池を真中にして、北の方に興福寺、南の方に元興寺といふ二大寺院が並び建つて居つたのであります。さうして、偉い僧侶も多く輩出致したのであります。興福寺には義淵、玄昉、道鏡他があり、元興寺には有名な道昭其他澤山の高僧が居つたのであります。支那の唐の時代に玄奘といふ高僧が印度から歸へりきました時に、お經の翻譯には古い譯と、新しい譯の二ツのものがあるが、古い譯のものはいけない、新しい方が正しいのであるといふことを言ひ出したのであります。ところが法相宗がもとゝして居る唯識論は新譯のものでありますために、ひどくその値打をあげたわけであります。華嚴或は三論で使つて居るところ

の書物は何れも皆古い譯であつて、間違つた説であるといふやうなことで、ひとり法相宗が勢力を得たのであります。

◇ 官僚佛教と僧侶

誰方も御承知のことでありませうが、奈良朝時代の佛教といふものは、總て寺院中心に行はれたものであります。興福寺にしても元興寺にしても、又後に出來た東大寺にしても、みな官立でありまして、政府が建立したのであります。さうして朝廷が之等に對し非常に保護を加へたので、寺院は非常に多くの地面を持ち、朝廷から澤山な金を貰つて随分勢力のよいものであつたのであります。今で申しますと、この當時の佛教は所謂官僚佛教と稱すべきもので、僧侶といふものは非常に身分をよくされ、立派な位につき、立派な着物を着て裕かな生活をして居り、さうして多くの人々から敬はれたのであります。さうして、これら僧侶の説くところのものは、唯識論などをもととして説く爲め、極めて高尚な教でありましたので、當時の人々には十分理解が出來ず、一般俗人の耳には入らなかつたのであります。しかしながら寺院としては、門徒があつても無くても、多くの財産を所有して居る爲め、生活には何ら差支へ無く極めて樂であつたのであります。かういふ有様であつたので、僧侶になることは一般に美望の的となつて居たことは勿論のことです。但し僧侶になるには一定の難しい制度がありまして、誰でも望みのまゝ僧侶となることは出來なかつたのであります。

ところで、これ等僧侶は實際何事を爲して居つたかと申しますと、先づお經を讀むこと、次に其講釋をすること——この二ツが主なる仕事であります。勿論お經を讀むのは、讀誦であつて、棒讀に讀むのでありますから、聞くものには何のことか分らないのであります。又講釋といひましても六ヶしいことを云ひます爲め、餘程嚙碎いて講釋されても、一般の人々には分るわけはなかつたのであります。

◇ 山林佛教の擡頭

斯の如く、所謂官僚佛教は一般民衆の心より離れた六ヶしいことを説いて居つた爲めに、だん／＼一般の人々に受入れられなくなつてきました。それ故に中には寺で得度を受けることなく、自ら得度して佛教の道を求めるものが出てきたのであります。自分で得度することを自度といひますが、斯いふ人達はお寺へ入らないで山林に入り、居を構へて佛教の道を求めて修業したのであります。かうした自分で得度して山林へ入いて修行するものは沙彌と稱せられ、この時代にはこの沙彌の数が相當澤山あつたことは、記録によつて知ることが出来るのであります。要するに、これらの人々は官僚佛教の拘束から離れて、自由なる佛教を奉ずる爲め都會の寺院に入らず、山林に去り自ら道を求めたものであります。これが即ち山林佛教の起つた所以でありまして、其後山林佛教は次第に盛んとなり遂に官僚佛教を脅かすに至つたのであります。それが爲めに奈良朝時代の末、天平元年には朝廷から山林佛教の抑制に關する禁令が出たのであります。それを讀んでみますと

『山林に停住し偽りて佛教なりといひ、自ら作し人を教へ、習を傳へ業を授け、書符を封印し藥を合せ、毒と造り、萬方性を作し、勅禁に違犯するものを斬流せよ』

とあります。この禁令の大意を申しますと、僧侶の非ざるものが寺院に居らず山林に入つて居を構へ、さうして佛法で無い法を説きてこれを佛法といひ、自分勝手な考によつて人を教へ、多くの人民を惑はすものは、重きは死刑に處し、輕きものは流罪に處するといふ意味のものであります。かやうに禁令の出た所以は、實は官僚佛教の坊主達が民衆の信仰を得たる山林佛教が漸次盛んになるを恐れて、官權を利用してやつたものであります。即ち山林佛教は、官僚佛教が一般民衆の信仰からは縁遠いものであるところから起つたもので、眞面目に生死の問題につき考へる人々から尊奉せられたので、その勢力は實に侮り難いものがあつたので、之を抑へつけなければならぬので、官僚佛教の輩が直接間接壓迫を加へ、かなりひどいものがあつたのであります。

◇ 行基菩薩の行績

其頃山林佛教の中には行基といふ偉い人が出たのであります。この人は實に宗教といふものを眞面目に考へた人でありまして、法を説きながら全國を巡回して、橋の無いところには橋をかけ、池の無いところには池を掘つて灌漑の便を増し、又貧乏人を救助するの道を立て、或は又宿所の無いところには宿所を設けて旅行をするもの、便宜を圖り、其他家の無いものに對しては、無料宿泊所の様なものを作るなど、今日云ふところの社會事業に全力を盡

したのであります。然るに官僚佛教はこの行基の行をも非とし、非常に壓迫したのであります。養老元年の禁令に

『職を置き能を任するは愚民を導く所以、法を説き制を立つるは其非を禁断するに由る。頃者百姓法律に乖き違ひ恣に其情に任せ髪を剪り鬚を髡て軽く道服を著く、豹は桑門に似たれとも情は奸姿を挟む、詐偽して姦を生ずる所以、兀として斯より起る一也、云々』

これによると近頃百姓が法律に背いて、自分の心のまゝに髪を切り、髯を剃つて僧侶の服を身につけ、その形といふものは恰も坊主に似て居る。大體僧侶といふものはお寺にあつて師匠から佛法を學び、さうしてそれを人に傳へるべきで、勝手にさういふ眞似をしてはいけないといふのであります。又其の次に

『方今小僧行基並に弟子等、街衢に零疊して妄に罪福を説き雨堂を構へて背臂を禁制し、門を歴て、假説して強いて餘物を食ひ、聖道と詐稱して百姓を妖惑す道俗擾亂して四民業を棄て、進んで釋教に違ひ、退て法令を犯す云々』

といふことであります。行基がやつて居ることは佛法に背き、法例を犯すものであるとして禁止せられたのであります。この他山林佛教壓迫に關する禁令は未だく澤山ありますが、これは前申した如く官僚佛教の輩が官權を利用して山林佛教を壓迫したのであります。

◇ 山林佛教の隆盛

しかしながら山林佛教は官權の力をもつてしても、或は又如何なる力をもつて壓迫してもこれを抑へることが出来ぬのであります。養老年間より約二十七年、八年たつた後の光仁天皇の御代には、行基菩薩賞讃の詔が出るに至つたのであります。さうしてその詔には

『勅、もとの大僧正行基法師は戒行具足し智徳兼備す、先代の推仰する處、後世以て耳目となす云々』とありまして、行基は追賞せられたのであります。

以前には小僧行基であつたのが、今度は大僧正行基法師であります。この一例によつて見るも、山林佛教がいかにか其勢力を得るやうになつたか窺ひ知ることが出来るのであります。かやうに光仁天皇の時代から、山林佛教はだん／＼盛になつたのであります。其の次の桓武天皇の御代に至りて一層、山林佛教は強く支持後援されたのであります。

◇ 遷都と佛教

桓武天皇が都を奈良から山城へ遷し給ふたのは官僚佛教の僧侶達が横暴であつて、遂には政治のことに迄も、口喙を入れるやうになつたといふことが一ツの原因でありました。彼の玄昉、道鏡等が出まして、色々政治に干渉し

たことは歴史上著明の事實であります。そこで都を山城の長岡へ遷すべく計畫せられたのでありますが、僧侶は總て奈良に残すやうにせられたのであります。けれども何分經濟の問題があり、又いろ／＼政治の問題があつた爲め、この遷都は二年経つても、三年経つても實行することが出来なかつたのであります。しかるに、延暦三年俄かに今の京都である平安に都を遷されたのであります。勿論寺院と僧侶とは皆奈良に残されてしまつたのであります。山城といふ處は以前から山林佛教の盛なところであつて、偉い僧侶も随分居りまして法を説いて居つたのであります。かやうに、奈良から京都へ都を遷されたのは、桓武天皇が佛教の墮落するをひどく御心配になつて、どうしても政治と僧侶を離さなければならぬといふ御心から、御實行になつたものと言はれて居りまして、結局その目的は成就された譯であります。

◇ 傳 教 大 師

平安に都が遷された其の頃、傳教大師最澄が世に出られたのであります。この人は奈良朝時代の末に比叡山の麓に近い滋賀の郡に生れ、齡若くして宗教に志しの深い人でありました。十二歳の時に、僧侶となるために得度したのであります。丁度近江の國分寺の住職が亡くなりましたので其の後を襲つて僧侶となり其寺へ入つたのであります。それから奈良に赴きて佛教を學び、十九歳の年に比叡山に佛堂を建立し、後に一乘止觀院と名づけられ、更に後に至りて延暦寺となつたのであります。傳教大師が比叡山に佛堂を建てられた時に、桓武天皇は、ひどくそれを保護

したまひ、俗にいふ落成式の時には、御自ら山にお上り遊ばされたと傳へられて居るのであります。

◇ 日 本 佛 教 の 成 立

それでこの傳教大師は、一体どういふことを説かれたのであるかと申しますと、それら多くのお經の中から妙法蓮華經、略して法華經といひますものを取り出されて、このお經に説かれてあることを實際に行つてゆかふといふことを主張し説かれたのであります。こゝに於て今日我々が所謂佛教として知つて居るところの宗教が、初めて我邦で成立したのであります。これよりさき行はれた南都六宗、即ち華嚴、三論、成實、俱舍、法相、律といふやうな佛教は印度又は支那の傳輪で、日本佛教としては成立しなかつたのであります。この意味からいへば傳教大師は我國佛教の先祖であるといつても少しも差支へ無いのであります。

實際の方面から見ますと、この傳教大師が説かれたことは、南都六宗が説いて居つたこととは大變に違つたものであります。即ち南都六宗中最も勢力のあつた法相宗に於ては五性各別といひまして我々は生れつき五ツの異つた性を持つて居るものであると説いたのであります。それは

第一は菩薩性——生れつき佛に成るもの

第二は聲聞性——聲を聞くといふことで、説教を聞いて悟りを開くことの出来るもの

第三は緣覺性——緣に觸れて獨りで覺とることの出来るもの

第四は不定性——どちらか定まらないところのもの

第五は無性——全然性の無いもの

この五つの性であります。さうして聲聞、緣覺の二つは之を二乗と申しますが、この二乗の性は佛には成れないのであります。五性の中でたゞ菩薩性だけが佛に成ることが出来るといふのであります。従つて奈良朝時代の佛教では、佛になるものは殆ど無かつたと言はねばならぬのであります。ところが傳教大師は法華經をもとゝし、一切の衆生が悉く佛性を有するのであるから、すべてのものが佛に成ることが出来ることを説かれたのであります。殊に又人間衆生のみで無く宇宙一切のもの、山川草木、穀土みな佛性をもつて居るといふのであつて、今日我々が奉じて居るところの眞の佛教は、この精神を以て行はれて居るのであります。さうしてこの一切のものが佛になるといふ精神は、總てのものは同じものであつて差別の無いものである、悉く是父母であり兄弟である。故に憐みの心をもつて一切を包容しなければならぬのであります。この心を佛教では慈悲といふものであります。かやうにして我々は慈悲の心をもつて、世の中を渡つてゆかなければならぬといふのでありまして、傳教大師はそれを強く唱道されたのであります。傳教大師のこの精神からあらはれた宗教が即ち天台宗であります。しかし、天台宗といふ宗旨は元來支那で起つた宗旨でありまして曾て傳教大師は支那に行き天台宗を修められたのでありますが、大師が歸朝して我邦に興された天台宗は、支那の天台宗とは違つたものでありまして、之は日本天台宗ともいふべきものであります。かく傳教大師は法華經をもとゝして天台宗といふ宗派を興されたのでありますが、之より前聖德太子はそれをも

とゝして憲法十七條を作られました、其の中に「和」といふものを根本の考へとし、三寶を敬ふことを教へられて居りますが其のあとを繼いで法華の精神を世に傳へるものはなかつたのであります。

◇ 舊佛敎の壓迫

傳教大師が法華經を唱説して新佛敎を興されたのに對して、南都の舊佛敎を奉ずる僧侶は、これに反對をしたのであります。前申した通り法華經は舊譯に屬するお經でありますから、當時の考へとしては、さういふ舊譯は駄目であるといふところから新譯を用ひて居る法相宗が勢力を得て居つたので、天台宗に對して壓迫を加へたのであります。さうして天台宗に於ける戒律——之を圓頓戒といひまして、一切のものが戒律を受けて總て佛に成るといふのであつて、又一乗戒ともいひます。誰人でも受けることが出来るのであります。これは南都の舊佛敎に於けるものと相違して居るのでありますから、圓頓戒の戒壇を建てるといふことは非常に困難でありました。その時分戒壇として我邦に存在したのは奈良に一ツ、關東下野の藥師に一ツ、それから九州筑前太宰府に一ツ、都合三個の戒壇がありました、それは勿論小乘的のもので誰でも戒を受けるといふことは出来なかつたのであります。それに對して、傳教大師の一乘圓頓戒は大乘的のものでありましたので、南都舊佛敎の反對が激しく、傳教大師のなくなればすままでは遂に成立が出来なかつたのであります。新佛敎としての天台宗は、かやうに南都舊佛敎からひどく壓迫されたのであります、しかし、宗敎はいくら理論をもつてしても、或は官權をもつてしても最後までこれを壓迫す

ることは出来るものではなく、傳教大師の天台宗も其内に段々と盛となりまして、苟も佛教を學ぶにはどうしても叡山に登らねばならぬやうになりました。さうして時宗、淨土宗、淨土眞宗、日蓮法華宗等の宗派が天台宗から新に分れて出たのであります。ただ禪宗を一派としたのは支那からの傳來であります。天台宗の中にも禪といふのもあります。又眞言も天台宗にあるのであります。之れによつてみますと、我國の佛教は大抵この天台宗が網羅して居ると言つても差支ないのであります。かの日蓮上人はその新宗教を樹てる時に、他の宗派の弊害を指摘して、禪は天魔、律は國賊、念佛は無間、眞言亡國と強調して居りますが、傳教大師の佛教だけは何ともいはなかつたのであります。兎に角我邦の佛教を創めたのは全く傳教大師の力によるものであります。

(昭和拾年貳月拾四日講演)

第 六 席

前回に於きまして、傳教大師の興起された天台宗のことにつきて大體お話を致したのでありますが、今日は少し重複しますが、もう一度天台宗のことにつきて繰返しお話をし、お聞きを願ひたいと思ふのであります。

◇ 奈良朝時代の宗教と傳教大師

傳教大師は御承知の通り平安朝初期の人でありまして、延暦年間に活動された人であります。その以前は所謂奈良朝時代でありまして、大なる寺院は總て奈良にあり、所謂南部六宗が盛んに行はれて居つたのであります。さうしてこの奈良六宗は何れも結局は官僚佛教であり、都市佛教であり、さうして又貴族佛教であり、衣食の佛教であつたのであります。傳教大師はかういふやうな宗教では眞面目に道を求むる心の満足は得られないことを知り、遂に都を去つて山の中に入り自分自ら進んでゆくべき道を求められたのであります。即ち道心の佛教を起さうとされたのであります。

◇ 法 相 宗

已に前にも申したのでありますが、南都六宗中主なるものは法相宗と三論宗とでありまして、殊に法相宗が最も盛んに行はれたのであります。さうしてこの法相宗の根本思想とするところは、萬法唯識の考へでありまして一切のものは唯一の心から現はれてきてゐるのであつて、世の中の事物は心の影である。さうして心の中の本當の存在とすべきは眞如である。しかしながら眞如といふものが心の外に別にあるので無く、心の中にそれが存在して居る。我々の心は常に散亂して居るものであるが、その亂れてゐる心の中に眞如があるといふ考へであります。例へば水といふものに就いていへば、流動して居るその相姿が現象である。その中にある酸素、水素はその性で、性は眞如であります。かやうに物の現象を相といひ、眞如を性とするとところから法相宗は一に性相宗とも名づけるのであります。

この法相宗にて、已に前に申したやうに生れつきの性を五ツに別けましてその五ツの性の中で結局佛に成ることの出来るのは唯菩薩の性だけで、他のものはどんなに修業しても佛にはなり得ないと説いたのであります。この考へからしてみますと奈良朝時代では佛に成るものは或一部のものだけで、多くの人は殆ど全く成佛することが出来ないと言はねばならなかつたのであります。

◇ 三 論 宗

次に三論宗といふのは已に前にも申した通り、その根本とするところの思考は、一切空と觀することでありまして、我々が普通に考へると眞の「斷」「常」「一」「異」「生」「滅」「去」「來」の八ツの思考を否定して皆之に「不」を付け「不斷」「不常」「不一」「不異」「不生」「不滅」「不去」「不來」が本當のものであるとしたのであります。専門の言葉にては八不中道といつて人間のいろ／＼の考へを否定したところに中道があると説くのであります。

三論宗は大體かういふやうな哲學的思考を本とした宗教であります。これを要するに概して言へば、法相宗では有といひ三論宗では無いといふ結論になり、奈良朝時代互にこの二ツの所説が衝突して議論が盛にされたのであります。さうしてどつちが正しい考へか容易に決しなかつたのであります。

◇ 小 乘 佛 教 と 大 乘 佛 教

大體、法相、三論の所説は小乘的佛敎の考へでありまして、小乘とは小さい乗物といふ意味で、誰でもが乗ることが出来ないといふ意味であります。或一部の偉い人のみしか乗ることが出来ない宗教であるといふことを示すのであります。傳敎大師は、かやうに三論、法相の兩宗が互に爭論をして居る時分に出られた人でありまして、小乘

的の所説を排斥して、専ら大乘的佛教の精神を唱道せられたのであります。傳教大師の言はれるには今の世は末法時代であるから（釋尊が死なれてから後の時代を正法時代、像法時代、末法時代の三ツに分けて、末法時代では教のみが傳り之を行つて悟りを開かふとするものが無いといふのであります）釋尊の云はれた言葉や教は残つて居るけれども、それを行ふ人、或はそれによつて悟りを開くものは無いのであるから、さういふ難かしいことを教へても駄目であるとして、法華經の精神を説かれたのであります。

◇ 金 光 明 經

前回に於て申しました通り、法華經は聖德太子が初めて講釋をされ、その精神を傳へられたのであります。その要點は和といふことが最も大切なことであるから、お互に慈悲の心をもつて和合してゆかなければならないといふのであります。更に十七憲法といふものを作つて和の精神を強く主張されたことは前に申した通りであります。それからこの時代に行はれましたお經は金光明經といふものであります。朝廷では厄病、早魃其他災厄が起ると直ぐにこのお經を轉讀せしめられたのであります。このお經の中には、いろ／＼な神さんを書き、之を祀ることがいろ／＼とさかんに書かれてあります爲めに、佛教でない神さんが、例へば陀枳尼天、吉祥天、麻利支天、多聞天といふ様な多くの佛教の神でない波羅門の神さんが、この金光明經にはひどく崇めなければならん様なことが

書いてありまして、それが行はれたのであります。又この金光明經によりて鎮護國家といふ精神が宣揚せられたのであります。

◇ 天台宗の根本精神

傳教大師の天台宗は已に前にも申したやうに、法華經に據られたのであります。法華經の根本精神は「悉有佛性」でありまして、一切の衆生が悉く佛性を有するが故に、すべて成佛するといふ所謂大乘の精神であります。奈良朝時代では僅かに一部のものを以外は如何に修業しても、佛になることは出来ないとの考へであつたところへ、如何なる悪人でも悉く佛になることが出来るといふ、大乘精神が唱道せられたことは思想の上からみると大きな革命でありました。

前にも申した通り、天台宗は元來支那で起つた宗派でありますけれども、支那天台宗と傳教大師の天台宗とは相違して居るのであります。天台宗の所説は諸法實相、一念三千といひまして一切のものは、そのまゝの姿をみてゆかなければならない、さうして人間の一念には三千のものが皆含まれて居るものであるといひ、佛も衆生も、地獄も極樂も何れも同じ諸法實相の相姿であるといふのであります。この思考からして、煩惱即菩提となり、生死即涅槃となるのであります。この思想をもつて天台宗といふ宗派が起つたのであります。ところが傳教大師の起された天台宗は、この所説を根本とし、更にその上に戒、密、禪、の三ツの方法が加へられたのであります。

◇ 一 乘 圓 頓 戒

戒とは戒律であります。これには律宗といふ専門の宗派もありますが、本と戒は佛教に於ては、ひどく喧ましく説くところのもので、悪いことをやめて善いことを行ふべきといふのであります。殊に悪いことをやめるといふことを強く教へて居るのであります。しかし、南都六宗の戒は小乗具足戒といはれて、少く二百五十の戒律を保たねばならぬのでありますが、それは普通の人には出来ないことであります。そこで自然宗教といふものを一つの仕事とする宗教家が出来たわけでありまして、専門的な宗教家だけが宗教をやるといふことになり、宗教としての精神が無くなつて居つたのであります。ところが傳教大師は之に對し一乘圓頓戒といつて誰でも出来る、やさしい戒律を説かれたのであります。一乘といふのは、さき申した菩薩、緣覺、聲聞といふ様に三ツに分けるので無く、總てのもの皆が佛になることが出来るといふので之を一乘といふのであります。この一乘圓頓戒によつて、奈良朝時代區別されて居つた僧侶と僧侶でないものとの區別を取り去つてしまつて、誰にでも出来るといふ大乘のものになつたのであります。傳教大師の説によれば戒といふものは自分で自分の心を向上せしめるのがその目的である。さうして自分の心を向上せしめると同時に、それを固く守ることによつて多くの人を互に結び、一切のものを融和せしめやうといふのが根本的の目的であるとして、食ふものも食はず、着るものも着ず、身體を苦しめるやうなことは決してこれを戒律として説かれなかつたのであります。

◇ 眞 言 三 禪

次に眞言は密教であります。之は支那で盛に行はれた宗教で、一言にして申せば、秘密な法を修するのであります。専門的にいへばいろいろ理論もありますが、要するに一つの法を言葉に出さないで、秘密にやつてゆかうといふ教であります。傳教大師は支那に行きこの密教をも勉強して歸へられたのであります。さうしてそれを自分の天台宗に加へられたのであります。この密教を傳教大師よりもつと専門的にやられたのが、弘法大師でありまして、弘法大師は眞言宗として別に一派を立てられたわけでありまして、

それから禪であります。之は釋尊の教では非常に喧ましく教へられて居るもので、禪といふのは、散亂せる心を靜かにすることでありまして。心を靜めなければ本當の智慧を得て悟りを開くことは、到底出来ないといふわけでありまして、この心を靜めることを一つの宗派としたのが禪宗であります。禪が宗派として獨立したのは鎌倉時代でありまして、傳教大師の時代より六百年も後のことであります。傳教大師は禪をも矢張り一つの方法として、その天台宗に用ひられたのであります。

◇ 新興の天台宗

かくして傳教大師は法華經の精神を主とし、これに戒律と秘密の法と禪との三ツの法を加へて、一つの新しい佛

教を興されたのでありますが、當時この新宗派は公に認められるまでには至らなかつたのであります。延暦二十一年傳教大師が高雄山に於て法華經の講釋をされたことがありますが、それは和氣廣世といふ人の主催せる會でありまして、廣世は有名な和氣清麿の子で學者でありまして共に佛教の信者でありました。この和氣廣世は父清麿公の追善の爲めに、その頃比叡山に居られた傳教大師を高雄山に招んできて、法華經の講釋を依頼せられたのであります。同時に奈良の偉い僧侶、學者達も招待したので、随分多くの人が其席に集つて大師の法華經の講釋を聞いたのであります。さうしてその講釋が大變に評判が好くて、桓武天皇もひどくお褒めになり、又奈良から來た法相、三論の偉い人達も誠に新しい講釋を聞いた、今迄長い間三論、法相と争つて居つた議論もそれによつて解決することが出た、誠に結構だといつて禮狀をよこしてきた位でありました。其結果傳教大師は支那に留學することを許され弟子を連れて支那に行かれたのであります。

◇ 傳教大師の苦闘

かくて支那に行かれた傳教大師は支那に滞在すること僅か八ヶ月あまり、前後一年かゝつて歸朝されましたが、その後支那でいろ／＼集められて持つて歸へられた書物等によつて、今迄の考へを一層強く主張されたのであります。又桓武天皇並に其後の天皇がこの新しい傳教大師の佛教に御力を入れ給ふたので、奈良の方では機嫌を悪くしこゝに於て又もや議論が始まつてきたのであります。さうして傳教大師はそれに對して所謂惡戰苦闘をされたの

であります。元來傳教大師は奈良の僧侶が官僚佛教のお蔭で金持であつたのに反して、ひどく貧乏でありまして比叡山の寺も自分自らの金で建てられたもので、勿論いくらかの補助金は貰つたにしても、誠に微々たるものであります。従つて絶えず貧乏な生活をして居られたのであります。又傳教大師は自から信ずるところを行ふて、妥協といふことをしなかつた人で、自分の考へをどこ迄も通す人であつたことと、その説くところのものは主として國家の爲めにしようといふ精神より出たものであるから、早くいへば俗人の耳に入らないところから一般の人民には餘り具合がよくなかつたのであります。

◇ 傳教大師の遺言

大師は一面に於て貧乏な生活と戦つてゆかねばならなかつたと同時に、新しい佛教でありますから、宣傳もしなければならず、又一方奈良の佛教に對抗して争つてゆかねければならぬといふ風で、随分困苦な状態に居られたわけであります。さうして齡若く五十才を過ること僅かにして死なれたのであります。即ち弘仁十三年の四月であります。もつと生きて居られたならば餘程具合もよくなつたであらうが——それにしても傳教大師の我國佛教に遺された行蹟といふものは、實に力強い大なるものがあるのであります。傳教大師が正に命の終るを自分で自覺された時に、弟子を集められまして遺言をされたのであります。それは次の通りでありました。

「我々は大慈大悲の心を始終持ち、忍辱の衣を着て、俗人の着る衣を着ない様にしなければならぬ。さうして衣食住に就いては分に應じて満足する様にしなければならぬ。我々は奈良の坊さんなどのやつて居る、あ

の大きな伽藍といふ様なものは自分らの居るところではない。自分らの住むところは唯三ツの間があればよい、一ツの間は佛さんを祀り、一ツは自分が住み、あとの一ツは色々仕事をする間とし、それで十分だ。自分はこの一乗の法を弘める爲めに生れ變つてくるから、お前達もこの法を傳へる爲めに生れ變つてこい。」といふ意味のことを弟子達に遺言され、最後に斯ういふことを言はれたのであります。

「自分は生れてからこのかた、口で荒い言葉を出したことが無い。又手でもつて人を鞭打つて罰を加へたことも無い。今お前達が子供を罰し鞭打たないで呉れれば、自分の爲めには大きな恩である。」
傳教大師のかういふ心持からいふ態度は、いふまでも無く法華經の精神であります。

◇ 傳教大師の君子養成

傳教大師の一生に就いては、今こゝで詳しくお話する必要はないのであります。唯前にも申しました通り我國佛敎が、どういふ風に變化して今日に至つて居るものであるかを申上げるために、傳教大師のことをお話いたしましたのであります。唯最後に一ツ申上げ度いことは、傳教大師が最も力を盡されたのは、君子を養成することであつたといふことであります。さうして、その爲めに學生式といふものを設定せられたのであります。君子とは道心のあるものを指すので、それは國の實であると言つて居られるのであります。この道心を持つて居るものを稱して西(印度)では菩薩と稱し、東(支那)では之を君子といふのであると説明して、君子養成が實に緊切のことであると主張せられたのであります。

◇ 法華經思想の興隆

傳教大師のお蔭によつて、法華經の思想が廣く天下に傳はる様になん／＼なつてきたのであります。無論傳教大師は今申した通り開祖として、種々の苦みを味はれた人でありましたが、其後、敎を繼いだ人に澤山偉い人が出て大師の敎を弘められたわけでありまして、後白河天皇の御代になりますと、天下皆法華經をもつて旨とし、之をもてあそばさる輩は人にして人に非ずといはれたほどに盛になり、法華經は世の中に廣つたのであります。之は要するに傳教大師の苦闘のお蔭であります。

◇ 念佛の敎

次で慈覺大師、智證大師等の偉い人が比叡山にあらはれ、殊に慈覺大師は支那から歸へられましてから、常行三昧堂を建て、専ら彌陀の名を稱へることを傳へられたのであります。勿論傳教大師もこのことは已に説いて居るのであります。一層強く云はれたのであります。さうしてこの敎が其後多くの偉い人によつて傳へられたのであります。有名な人として最初に申したいのは空也聖人です。空也聖人は念佛の功德を多くの人に與へてやらうと考へられまして、後全く京都にあつて、京都の街を方々人を連れて鐘をたゝいて念佛しながら歩き廻り、時としては、自ら踊られて、所謂空也念佛といふものを初めて起されたのであります。聖人は醍醐天皇の皇子であるといひ、又仁明天皇の御孫だとも傳へられて居りますが、兎も角貴族であります。さうして、傳教、慈覺兩大師によつてははじめられた彌陀念佛——阿彌陀佛の名を稱へるといふ敎を實際に實行された人です。當時の人は空



也上人を彌陀聖と申したといふことであります。ある時同じ天台宗で勉強した良源和尚の弟子である源信——慧心僧都ともいひますが——といふ人が空也聖人に會ひまして、『あなたは念佛を申して、極樂往生を説かれて居りますが、それは一體どういふわけですか』といふことを問ふたのであります。すると空也聖人は『私はさういふ難しいことは少しも承知して居りません。私は唯先輩から彌陀の名を稱へれば、極樂に往生するといふことを聞いて、それを行つて居るだけです』と答へられたので、源信はひどく感心をしてその後熱心に念佛の教を實行される様になつたのであります。さうして書かれた書物が往生要集といふのであります。之は前に地獄のことを説き、後に極樂のことを説いて、地獄をはなれて極樂にゆけと教へ、地獄といふのは我々のこの生活の浅ましい姿を書いて、この世は實に穢いところだから、もつと佛の清かな國に生れる様に力めなければならぬといふことを教へてあるのであります。さうして之を公にされましたが、念佛の教、淨土の教を説いた書物としては誠によく纏つたものであります。

この念佛の教は、その後空也聖人から源信和尚それから法然上人、續いて親鸞聖人と偉い人が現はれ、だん／＼盛に行はれる様になつてきたのであります。

斯ういふわけで傳教大師が法華經を中心として、それに戒律、密教或は禪といふ様な方法を加へて天台宗を起され、それより次第に一般民衆の宗教となりまして、結局その教の精神は念佛となつて現はれるやうになつたのであります。

宗教の必要なことは云ふ迄もありません、文部省も一般國民も最近漸く力を茲に注がれて来た様です、人間は心の教養が一番肝要であり、佛教は心への教を説き、人間として眞に正しき生き甲斐のある生き方を明確に指示するのであります。我佛教會に御入會なき方は至急御入會下さい、本會は昭和九年三月の創立でありまして、毎月講演があり講演料も本書を以つて第三回目の出版であります。

御申込は秘書室内

三和佛教會

昭和十年六月二十日印刷
昭和十年六月廿五日發行

講演者御承認済
複製不許

編輯者 三和佛教會
發行者 三和佛教會

印刷所 大原帳簿製造所
大阪西區京町堀上邊二丁目一五

—【非賣品】—

終

